

文芸誌から読みとく「文学史」試論

——『すばる』「読者のページ」を題材に——

宮崎 貴明

はじめに

文学の登竜門・発表の場として戦後日本における大きな影響力を商業文芸誌は持っている。元号も令和へと変わり、昭和・平成が歴史の中に位置付けられていく中で、戦後日本文学及びその文学史を考える際に文芸誌という枠組みは決して看過できないであろう。実際に『文藝』戦後文学史⁽¹⁾のような文芸誌を軸に置いた「文学史」の試みが既に存在する。それは『文藝』（河出書房新社、一九四四―）の編集者・作家・文学賞についての回顧録のような社史を思わせる形式であり、『文藝』という雑誌が創り上げようとした文学・文学観を概観しうるものとなっている。この例のように戦後の日本文学の潮流を見出す上では、各文芸誌が創り出そうとしていた「文学」の分析が求められるのではなからうか。

本稿では戦後の日本文学史という大きな枠組みについて考察する前に、商業誌とも呼称される文芸誌たちの「商業性」について考察するところから始めたい。稿者の考える「商業性」とは、編集部などの人々により文学を他者へと伝えるために付与された、ある種

の文学の方針である。資本主義という思想が社会の基盤となった戦後日本において、文学の「商業性」の検討は欠くことのできない作業であろう。このような問題意識から端を発し、文学賞の運営などによって強い影響力を持つ「五大文芸誌」に着目した。「五大文芸誌」とは、『新潮』（新潮社、一九〇四―）、『文学界』（文藝春秋社、一九三三―）、『文藝』（改造社、一九三三―、河出書房、一九四四―、河出書房新社、一九六二―）、『群像』（講談社、一九四六―）、『すばる』（集英社、一九七一―）である。

『新潮』から順を追って考え始めるという道筋が先に想定されるであろうが、本稿では『すばる』を題材にとる。これらの中で後発の『すばる』は、季刊誌として評論中心のスタイルから始まった。月刊誌となつてからは、「読者のページ」に掲載された「**既存誌とは異なるスタイルをめざして**」⁽²⁾という投稿が象徴するように、挑戦的な編集がなされる傾向にある。このように色濃く戦後の社会状況を取り込み続けたであろう『すばる』を端緒として、商業と大きく接近した日本文学の考察をはじめめる。商業誌の牽引してきた日本文学について考えるにあたって、文学および文芸誌を創出してきた編集部⁽³⁾の意向も考慮する必要があるであろう。その素材の一つとなりう

る、『群像』と『すばる』に通期的に掲載された「読者欄」に着目した。⁽³⁾

「読者欄」の研究としては、社会学の分野におけるものが特に豊富である。『成功』(東京成功雑誌社、一九〇二—一九一五)⁽⁴⁾、『少年世界』(博文館、一八九五—一九三四)⁽⁵⁾、『女学世界』(博文館、一九〇一—一九二五)⁽⁶⁾などを対象としたものがあげられる。これらの研究では、投稿から読者像を見出すことや読者共同体を形成しうる読者間コミュニケーションの変容とその要因の分析がなされた。中でも他の研究と大きく視座を異にするものとして、『少年倶楽部』(講談社、一九一四—一九六二)⁽⁷⁾を対象としたものがあげられる。雑誌からのアクションだけではなく投書の選別・投書本文の編集などの要因により、読者のリアクションとしての投書にも編集部が深く関係していることを岩橋は指摘した。加えて「読者欄」分析は編集部の雑誌におけるアクション面についての分析を補足しうるものであることも示している。⁽⁸⁾さらに近年も思想運動の実態を『第三帝国』やその投書欄に求める研究や、投稿雑誌としての側面も持っていた『若草』とその投書欄・作品に「読者」像や彼らの紡ぎあげた文学を見出す試みなど、「読者欄」や投書に関する研究は大いに蓄積が進められている。

右記のように、「読者」と編集部、作家などが複雑に関係し合う「読者欄」の検討は、今まで文学研究には採り入れ難かった「読者」、ひいては編集部からの視点を補いうる可能性がある。

『群像』(講談社、一九四六—)は、一九五四年一月号—一九六一年一二月号に「読者月評」、一九六二年二月号—一九七一年一二月

号に「読者論題」という名で「読者欄」が掲載された。掲載期間も一七年と長いたため資料として充実しているが、本稿での考察対象は『すばる』(集英社、一九七一—)とする。他の文芸雑誌が「読者欄」を廃止していった中⁽¹²⁾でも、二〇一一年一月号まで『すばる』は「読者欄」の掲載を続けていた。⁽¹³⁾この点からも『すばる』および『すばる』編集部には、他には見られない特異性や色濃い「商業性」を見出しうるのではないかと考えた。

ここまで、文芸誌検討の必要性・「読者欄」研究の可能性・研究対象について確認してきた。次章以降では、『すばる』の「読書」へのアクション・「読者のページ」の基本情報を整理した後、「読者のページ」における編集部の直接的な介入について整理する。その後、編集部の戦略が色濃くみられた「辻仁成」について、関連する投稿を中心に考察を広げる。そこから商業的文芸誌が形成しようとした「文学」が如何なるものか、今後検討すべき課題を抽出することを本稿の目的とする。

一 『すばる』の「読者」へのアクション

本章では、月刊誌『すばる』における「読者」へのアクションについて整理する。月刊化当初、『すばる』には「読者欄」も「読者」の投稿欄も存在していなかった。「読者」への『すばる』からの能動的な最初のアクションは、一九八〇年一月号に挿入された「愛読者カード」である。編集の参考とするために実施され、「集英社の読書情報」(無料)が希望者に贈られた。その後は、一九八四年一月号—

二 『すばる』「読者のページ」の基本情報

一九八五年一二月号に、「短歌欄」が設けられ、短歌の募集もなされた。福島泰樹が選者であり、すべてが投稿によるものではないが、「今回は投稿歌より厳選した。いまの刻、アルプスの雪嶺に、雪は静かに降り積もっていることであろう。とまれ雪を溶かす熱き歌の投稿を待つ⁽¹⁴⁾。」とあるように、投稿が採用されたとわかる号もみられる。「短歌欄」の掲載終了と時を同じくして、「編集後記」も掲載が終了する。その一九八五年一二月号の「編集後記」では、「初春新年号から、「すばる」は内容もカバーも一新いたします。ご期待ください。」というコメントが掲載された。実際に一九八六年一月号から表紙・目次・レイアウト・企画が一新され、「すばる」ご愛読者アンケート（読者アンケート）と切手不要の回答用ハガキ（読者カード）が掲載されはじめた。先述した「愛読者カード」と同様に、これらは「今後の編集の参考」とするために実施され、回答者の中から抽選で当選者に記念品が贈られた。このプレゼント進呈は二〇〇五年四月号まで「読者アンケート」欄に明記されているが、二〇〇五年五月号以降は記述がなくなる。「読者アンケート」自体はその後二〇〇八年一二月号まで続くが、二〇〇九年一月号以降は掲載されていない。

「読者アンケート」が開始された直後の一九八六年二月号から、月刊誌『すばる』における「読者欄」として、「読者のページ」の掲載が始まる。一九八六年二月号～二〇一一年一月号の約二五年間に渡って「読者のページ」は掲載された。この「読者のページ」に関しては次章にて詳述する。

「読者のページ」は、一九八六年二月号～二〇一一年一月号の約二五年間に渡って『すばる』誌上に掲載された。投稿の合計数は二〇四四件である（表②⁽¹⁵⁾）。初期は二～四頁ほどの掲載量で揺れていたが、一九八六年一二月号以降は概ね二頁に定まった。一九九六年四月号から一頁と三段組みの一行分となり、二〇〇九年一月号から一頁のみとなる。そして、二〇一一年一月号で「読者のページ」への投稿を呼びかける記述がなくなるとともに、「読者のページ」の掲載は終了された。

基本的に『すばる』編集部が特定の内容を募集する形式ではなく、「読者」が各自で内容を設定していたようである。次に「読者のページ」に掲載された「編集部からの呼びかけ」を変更点とともに引用し、編集部が設けた投稿をする上での必要事項等を確認する。

○編集部では今号より、アンケートはがき自由記入欄のほかに、読者の皆さんからの“声”をお受けしています。本誌および本誌作品へのご意見・ご感想、または文芸・文化にかんする一般的な内容のものも歓迎いたします。「読者のページ」採用分にはアンケート欄と同じく記念品をお贈りします。住所・氏名・年齢・職業・電話番号を明記の上、左記宛てお送りください。東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ一〇（郵便番号一〇一）集英社すばる編集部「読者のページ係」⁽¹⁶⁾

【表Ⅰ】「変更点（一九八六年二月号～二〇〇八年十二月号）」

	変更前	変更後
一九八六年三月号	編集部では今号より、	編集部では、
四月号	住所・氏名	はがきまたは封書で、住所・氏名
六月号	記念品	図書券
	本誌作品	掲載作品
	氏名	氏名（誌上匿名可）
一九八八年六月号	郵便番号一〇一	郵便番号一〇一―五〇
六〇八月号のみ	図書券をお贈りします。	薄謝を進呈いたします。
一九八九年六月号	東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ一〇（郵便番号一〇一―五〇）	〒101・50 東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ一〇
一九九一年七月号	読者の皆さんからの	皆さんからの
	本誌および掲載作品	掲載作品および本誌
	図書券をお贈りします。	二千円の謝礼を進呈します。
	住所・氏名（誌上匿名可）・年齢・職業・電話番号 ⁽¹⁷⁾	

	変更前	変更後
一九九六年四月号	住所・氏名（誌上匿名可）・年齢・職業・電話番号 ⁽¹⁸⁾	
	左記宛て	下記宛て
	〒101・50 東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ一〇	〒101-50 東京都千代田区一ツ橋2-5-10 ⁽¹⁹⁾
九月号	皆さん	皆さま
一九九八年二月号	〒101-50	〒101-8050
二〇〇五年五月号	加 「※応募された方の個人情報、アンケート以外の目的に利用することはありません。」を末に追	

●編集部では皆さまからの声を引続きお受けしています。掲載作品および本誌へのご意見、ご感想などをお寄せください。「読者のページ」採用分には二千円の謝礼を進呈します。はがきまたは封書で、住所・氏名・年齢・職業・電話番号を明記の上、左記宛てお送りください。なお個人情報本ページ以外の目的には使用いたしません。

〒一〇一・八〇五〇 東京都千代田区一ツ橋二・五・一〇 集英社 ずばる編集部「読者のページ係」⁽²⁰⁾

【表Ⅱ】「変更点（二〇〇九年一月号～二〇一一年二月号）」

	変更前	変更後
二〇〇九年二月号	引き続きお受けしていまお受けしています。	
二〇一一年二月号以降、文面削除		

右記の変更点の中では二〇〇九年一月号における修正が最大のものである。しかし「読者のページ」の紙幅減少と「読者アンケート」実施の終了に合わせて文言を修正した程度で、微細な修正こそ多くあるが内容面での大きな変更はみられない。内容について特筆すべきことは、どの時期においても投稿が採用された「読者」に記念品等が贈られたことだ。「読者」の声を積極的に収集しようとしていた編集部の姿勢が窺える。

次は、誌面に掲載された投稿を構成する基本情報を確認しておく。一部欠けが生じる場合もあるが、どの投稿もタイトル・投稿本文・名前・住所・年齢が示された。投稿本文の文字数等、文量についての規定はない。「読者アンケート」用のはがきを用いた場合は、はがきの枠という制限は設けられたものの他のはがきや封書で送ることも可能であった。ここから長文の投稿もあったと推測できる。しかし、誌面においては掲載量に限りがあり、一部他の投稿と比べると量の多い投稿はあるものの、⁽²¹⁾文量はおおむね四〇〇〇～八〇〇〇字程度のものである。編集なしでそのまま掲載された投稿もあったと

考えられるが、小説の名前の省略をはじめ、編集者による要約や抜粋も行われていたと推測できる。掲載する「読者」を選ぶことに加えて、投稿の編集という点でも編集部の意図の介在が考えられる。「読者のページ」に掲載されている投稿の呼びかけの他に、編集部からの直接的な誌面上での「読者」への介入はあまり見られない。そのような中でも、僅かながら九号分⁽²²⁾に編集部のコメントが掲載されたことは見過ごせない。この編集部のコメントについては次章で詳述する。

その他の「読者のページ」における投稿以外の掲載物としては、「読者座談会のお知らせ」（一九八六年一一、一二月号、一九八七年一月号）・「訂正」（一九九四年一月号など）・『中上健次三回忌』熊野合宿セミナーのお知らせ（一九九四年七月号）・「読者アンケート」（一九九六年四月号～二〇一一年一月号）・「読者」に住所の詳細を求めるコメント（一九九二年四月号など）などがあげられる。それらの中でひと際異彩を放つ「次号予告 230 枚一挙掲載 辻仁成『クラウドイ』（仮題）」（一九九〇年四月号）という広告も掲載された。「読者のページ」内に広告が掲載されたのは、本例以外に存在しない。この異質な広告に関しては、「四」で詳述する。

全時期の投稿には、詩歌や評論についての投稿は少なく、小説や特集についての言及が多くみられるという特徴がある。殊に「すばる文学賞」や作家の追悼特集に対する投稿が多く見られる。注(5)・(6)に示した先行研究が指摘するように、少女雑誌・少年雑誌などの「読者」は他の「読者」に語りかけ、読者共同体を形成しようとする傾向がある。しかし、『すばる』の「読者のページ」では、他

の「読者」に語りかけ、読者共同体を作成しようとする投稿はあまり見られず、全投稿数から鑑みてもほとんどいないと言ってよいほどである。

先に述べたように、『すばる』「読者のページ」の「読者」に関する詳細な分析は稿を改めて論じるが、本稿ではその一例として「読者」の年齢について「読者」の投稿を用いて整理を試みる。「読者」の年齢について言及している二つの投稿を引用する。

「刺激・驚愕・共鳴」

半年ぶりに「すばる」を購入し、大変刺激を受けました。「読者のページ」をみても、読者層の若さに改めて驚きました。と
いうよりは共鳴を覚えました！〔……〕

（菱沼幹夫・埼玉県北本市・23歳⁽²³⁾）

「老若男女の文芸誌」

「若者の活字離れ」と言われて久しいが、必ずしもすべての若者が漫画ばかり読んでいる訳ではないことを知って大変うれしく思った。つまり、貴誌十二月号の『読者のページ』の投稿者九名中、十代から三十代までが七名も居ることから見て、貴誌が多くの若者に読まれている証左と見た。〔……〕

（上原あき・群馬県太田市・66歳⁽²⁴⁾）

「読者のページ」に若い「読者」が多くみられることに二名は感銘を受けている。この二人の「読者」の年齢からも、「読者のページ」

の年齢層の広さは垣間見えるであろう。実際に、最年少の「読者」は投稿当時15歳⁽²⁵⁾であり、最年長の「読者」は投稿当時87歳⁽²⁶⁾である。それぞれの号において、年齢に大きな偏りはなく、広い年齢層の「読者」たちの投稿で「読者のページ」は成り立っていた。⁽²⁷⁾幅広い年齢層の「読者」の投稿を掲載することや上原氏のように「読者」の年齢層を分析する「読者」の投稿を掲載することで、『すばる』が幅広い年齢層に支持されていることをアピールしていたとも読み取れる。先に触れたように、年齢の他、読者の属性・性質に関する具体的な分析は稿を改めて論じるため、今後の課題とする。次章では『すばる』編集部「読者」への介入について考察する。

三 「読者のページ」における編集部

本章では、積極的に「読者」へ介入する編集部のコメントをもとに、いかなる意図をもって編集部がコメントを残していたのかを検討する。先にも確認した通り、編集部のコメントは九号分にみられるのみである。内容としては、投稿を呼びかけるもの・投稿を分類して紹介するものがあげられる。

はじめに投稿を呼びかけるものに分類される、辻仁成「クラウドエイ」に関連するコメントを題材として取り上げる。

先に辻仁成について簡単に整理しておく。辻仁成は、一九八九年に小説「ピアニシモ」⁽²⁸⁾で「すばる文学賞」を受賞し、『すばる』一九九〇年五月号に受賞後第一作の小説「クラウドエイ」を発表した。その後も小説やエッセイの発表を続け、「海峡の光」⁽²⁹⁾で「第116回芥川

賞」を受賞した。文学のほか多方面の分野で活躍しており、ミュージシャンや映画監督などの肩書でも知られる。

彼の小説が「すばる文学賞」にノミネート・受賞した際には、彼のファンが作品を称賛し受賞を願う・祝う投稿が多く寄せられた。次に辻への「読者」の投稿と編集部のコメントを引用して検討する。

「クラウドデイ」が楽しみ」

「ピアニシモ」は、あのエコーズの辻仁成の作品とは知らず、いつきに読み通してしまった。彼のいいことがストレートに響いてきて、感動を受けました。次号は二作目の「クラウドデイ」が掲載されるそうで、今から楽しみにしています。

(宮地基嗣・広島県因島市・30歳)

※お待ちかね。今月号に掲載された「クラウドデイ」いかがでしたか。(編集部)⁽³⁰⁾

このコメントは、最初の編集部のコメントの一つでもある。宮地氏も少なからず辻仁成のことは知っているようだが、辻の作品と知らずに読んで感動したと「ピアニシモ」を称賛している。その投稿に対して編集部がコメントをしている。このことから編集部は辻という人物に対してだけでなく、彼の作品(「ピアニシモ」、「クラウドデイ」)に対しても大きな期待を抱き、「読者」の反応が多く見られることを予期していたことが窺える。さらに編集部のコメントでも「クラウドデイ」は宣伝されている。そのコメントを引用する。

※「クラウドデイ」は、6月5日小社より、単行本が発売されます。そちらの方もよろしく。ちなみに「EGGS」⁽³¹⁾はCSBソニー⁽³²⁾から発売中ですね。(編集部)⁽³³⁾

このコメントからも編集部が辻に対して、並々ならぬ期待を寄せていたことがわかるであろう。辻に関する投稿などについては、次章において詳述する。

次は、投稿が採用されたことに感謝する「読者」の投稿を引用・分析する。

「ハズカシイ！」

3月号に、私のつたない文章を載せて下さってありがとうございます。ありがとうございました。万が一にも「読者のページ」に自分の名前が載るとは全く思ってもいなかったことで、友達に言われるまで気付きもしませんでした。あーハズカシイ。これならもつとちゃんと書けば良かったと思っても後の祭りです。(……)

(柳川幸代・神奈川県横浜市・29歳)

※いつも気持の伝わってくる素敵な文章をどうもありがとうございます。柳川さんも、そして読者の皆さんも、気楽にハガキを書いてどんどん送って下さい。(編集部)⁽³⁴⁾

柳川幸代氏は一九九〇年三月号にも投稿が掲載されており、これが二回目の採用である。このように「読者のページ」に採用されることを誇りに思い、喜ぶ「読者」は少なからず存在し、その事実

を編集部も認めていた。類例として、『すばる』を初めて購読する「読者」(以下、「初めての「読者」」)の投稿とそれに対する編集部のコメントを引用して分析する。

「初めて『すばる』を買いました」

特別企画「海外文学フォーラム」が良かったです。私のような若輩者には、よい勉強になりました。初めて「すばる」を買ったかいたったというものです。

それから高橋源一郎さんの作品が英訳されるとの事。読んでみたいです。

(森嶋浩子・東京都立川市・18歳)

※いつも「すばる」を愛読して下さっているみなさんの御意見、御感想もちろんですが、森嶋さんのように初めて読んで下さった方の「声」も、もつともつと聞きたいですね。ハガキお待ちしております。(編集部)⁽³⁶⁾

購読を続けている「読者」の投稿はもちろん、初めての「読者」の投稿を強く呼びかけ、求める編集部のコメントが付されている。この投稿の見られた一二巻(一九九〇年)は、初めての「読者」の採用数も多い傾向にある。⁽³⁷⁾初めての「読者」の投稿を掲載することで、初めての「読者」がこれからも購読を続けるモチベーションに繋がったであろう。これらのことを踏まえると、新規「読者」を獲得するための手段の一つとして、「読者のページ」における初めての「読者」の投稿を採択していた可能性が考えられる。

次は、投稿を分類して紹介する編集部のコメントを引用して考察する。

☆7月号『文芸家協会退会の弁』⁽³⁸⁾にたくさんのご意見を戴きました。そのいくつかを御紹介します。⁽³⁹⁾

※『すばる文学賞』特集別冊⁽⁴⁰⁾1991」に寄せられたハガキの中から御紹介します。⁽⁴¹⁾

※「二一世紀への手紙」⁽⁴²⁾に対して、賛否両論、いろいろな意見が寄せられています。みなさんはどう考えますか。おたよりお待ちしております。(編集部)⁽⁴³⁾

これらは特集・特集別冊・評論に対する投稿が多くみられた際に、それらの投稿をまとめて紹介するコメントたちである。基本的には同じ作品に対する投稿や関連した投稿は、掲載順でまとめられる傾向にある。それにもかかわらず、これらの号では殊更にコメントで分類がなされた。とくに「二一世紀への手紙」に関しては、まとめて紹介するだけでなく、「読者」への投稿の呼びかけも付された。「二一世紀への手紙」は連載形式であったこともあり、一九九一年六月号以前にも曾野綾子や「二一世紀への手紙」への投稿が見られる。⁽⁴⁴⁾「二一世紀への手紙」への投稿が多く寄せられていたことも受けて、編集部はコメントでさらなる投稿を呼びかけたのであろう。次は小説について分類しているコメントを引用する。

※本誌5月号に掲載された、長沢伶一氏の「ロウ」⁽⁴⁵⁾への反響の一部を御紹介しよう。⁽⁴⁶⁾

これが小説に関する投稿をまとめている唯一のコメントである。「読者」に投稿を呼びかける言葉などの編集部からの積極的なアクションは含まれないが、「読者のページ」における異質なアクションの一つである。「四」にて論じる辻仁成への分析と同様に、長沢伶一への編集部の期待が読み取れる。このコメントと『すばる』本誌および社会状況などから「商業性」を検討しうる題材となりうるが、その考察は別稿に譲る。

次に「文芸時評」を取り巻く投稿と編集部のコメントを引用する。

「『文芸時評』への反論」

渡部直己氏の文芸時評は、こちらの程度が低いせいか、前半の文章は何が何だか分からなかった。むしろかきすぎるのか。

後半のあの表は何ですか。いつかの投書に、あんなていねいな時評はないと書いてあったのですが、あれはていねいとはいわないのです。あの表に載っているどれでもいいから心をこめて読んでみて、○×と寸評を比べてください。実はよく読んでいないくせに、あたらずさわらずのいやみに過ぎないことがよく分ります。

(山本太郎・山口市・50歳)

※「文芸時評」にも、たくさんのおたよりがとどいています。

あなたの御意見もお待ちしております。(編集部)⁽⁴⁸⁾

「文芸時評」自体は、担当者や形式は変化しているものの第一巻第一号(一九七九年一月号)から掲載されている。一九九一年一月号(一二月号は、渡部直己が「文芸時評」を担当していた。さらに、同じく渡部直己の「文芸時評」に関する投稿を分類しつつ、「読者のページ」の在り方の一例を示す編集部のコメントを引用する。

※渡部直己氏の「文芸時評」をめぐる御意見が、毎月たくさん寄せられています。ここではそのいくつかをご紹介します。賛成、反対、意見への反論など、この欄が皆さんの議論の場となれば、と思います。さらなる御意見、お待ちしております。(編集部)⁽⁴⁹⁾

このコメントの後には、「文芸時評」についての投稿が三件掲載されている。このコメントにおいて重要なのは、「文芸時評」についての投稿が多くみられることではない。更なる投稿を求めている点と、「議論の場となれば、と思います。」と「読者のページ」の投稿やページそのものに対する編集部からの要望が窺える点である。以後、一九九一年八、九月号では感想を求めるコメントのみとなる。そして、一九九一年九月号のコメントをもって編集部が「読者」の投稿やその内容に介入することがみられなくなる。しかし、編集部のコメントはなくなったものの、「文芸時評」に対する「読者」たちの反応は続いた。一九九二年一月号にて「文芸時評」の担当が渡部直己

から桂秀実へ引き継がれた後も、「桂秀実氏文芸時評への失望」・「なぜ連載中の作品を取り上げないのか」・「チャート分析表」は面白⁽⁵⁰⁾い」・「桂秀実氏の文芸時評は印象×××」⁽⁵¹⁾などの多くの反応がみられる。編集部からのアクションの有無にかかわらず、「読者」は投稿において反応を示すものであるが、編集部からのアクションによって「読者」のリアクションや関心が高まっていたことは推測できる。「文芸時評」をめぐるコメント群は、既に獲得している「読者」の中でも投稿をするほど熱心に購読する「読者」を更に獲得するための編集部の試みとの一つであろう。

本章では、「読者」へ直接的に介入する編集部のコメントについて考察した。ここから作家を売り出す場・新規「読者」を獲得する場・より熱心な「読者」を獲得する場として『すばる』編集部は「読者のページ」を活用していたことがわかった。編集部の意図・関心・『すばる』の方針・「読者のページ」の方針などを編集部のコメントからは読み取りうるといえるであろう。

四 作家という切り口から読む「読者のページ」

本章では「読者のページ」において特異な扱いを受けた作家、辻仁成を中心に据えて論を展開する。はじめに「読者のページ」における辻がどのような存在として考えられるのか、「読者」の投稿・編集部のコメント・広告などを用いて考察をする。その後、辻の作家、ひいては新人作家としての『すばる』における位置付けを確認する。そのために、「読者のページ」において「読者」から特に反響の多い、

「すばる文学賞」受賞作家を辻の前後に分けて取り上げて考察する。特に辻についての投稿が多く見られた『すばる』一二巻（一九九〇年）の頃は、先述したように「クラウディ」の広告や編集部のコメントが「読者のページ」に掲載された、最も「読者のページ」に動きがあった時期とも言える。その中で最も編集部力が注がれていた作家の一人に辻仁成は数えられる。この点が辻を考察対象とした所以である。辻は、「すばる文学賞」受賞後も作家として活動を続けた。そのため一九九〇年以降も「読者のページ」において高頻度で名前がみられるが、本稿では「すばる文学賞」の予選通過作が発表された翌月号から「クラウディ」が掲載された翌月号（一九九一年一月号～一九九〇年六月号）の投稿を中心に扱う。数多くある辻に関する投稿の中でも、本稿では「クラウディ」の扱いおよび辻の新人作家としての『すばる』における位置づけを中心に考察するためである。それでは次に、辻に関する最初の投稿を引用する。

「辻仁成ガンバレ」

11月号の第13回すばる文学賞予選通過作の発表を見て驚きました。というのは「ピアノシモ 辻仁成」の文字があったからです。

といっても、つきあいのある人ではないのですが、僕は彼のファンなのです。辻仁成さんは、エコーズというロックバンドのボーカルをしている熱い魂をもった青年なのです。彼の歌う曲には愛がある！

その彼が、小説を書いていたなんて知りませんでした。

今後の活躍を期待しています。

(宮崎孝典・横浜市栄区・18歳⁽⁵²⁾)

「すばる文学賞」の予選通過作の小説本文は雑誌に掲載されない。そのような形式にもかかわらず、「読者」からの反応が掲載された。この投稿が掲載された翌号の一九八九年十二月号において「第13回すばる文学賞」受賞作の発表がなされ、辻仁成「ピアノシモ」が奈良裕明「チン・ドン・ジャン」とともに「すばる文学賞」を受賞した。「読者」が辻に期待を寄せているのはもちろんだが、先月号に採用された投稿から編集部も辻仁成「ピアノシモ」に期待していたことが窺える。次は「第13回すばる文学賞」の発表後に掲載された投稿を確認する。

「心に響く作品を」

「ピアノシモ」はまるで時代に逆行するような重たい文章だし、そこに描かれた世界も確かに暗いものだったけれど、成長と開拓への激しい欲求で閉じられた物語の、その後のトオル君はジェントルなジャンゲルの都市をフォルテシモで生き抜いてくれるにちがいありません。

百万人に好まれずとも幾人かの心に響く作品を、大切にしてほしいです。表面の手軽さでごまかすのには、もう、うんざりなのです。

(長野洋子・福岡県北九州市・22歳⁽⁵³⁾)

「ピアノシモ」という作品を高く評価している「読者」である。「ピアノシモ」の主体獲得を目指す物語としての重みを味わっているようであり、単に作品を享受するだけに留まらず、新たな「重たい」作品を長野氏は強く期待している。「百万人に好まれずとも幾人かの心に響く作品を、大切にしてほしいです。」というように、他者には全く左右されないほど切実な要望である。次は読者が自身の小説を読むことに関する、辻の発言を引用する。

「『ピアノシモ』『クラウディ』そして小説家の至福と喜びとは辻仁成」

極端なことを言えば、どんな賞をもらうよりも、何万冊売ることよりも、たった一人の読者が、ぼくの小説を読んで、私の人生の中に大きな光を感じたと言ってくれることが、何ものにもかえがたい大事な宝石のようなものなんです⁽⁵⁴⁾ね。

長野氏の要求と同様のことを重んじ、それが小説を書く理由の一つであると辻は述べる。辻の発言時期が長野氏の投稿よりも後であるため、この記事を読んで長野氏が投稿した可能性はない。長野氏のように、辻の創作意識を見抜くような「読者」たちは、ミュージシャン時代の発言などの影響によるとも考えられる。しかし作家としての辻を支持する「読者」たちは、意識的か無意識的かは判断し兼ねるが彼の創作活動に求めるものをも読み取りうるほど熱心な「読者」とも言えるであろう。このように「読者のページ」における「読者」は、辻の創作やその態度を尊重し、辻仁成という作家に

強く期待を寄せていることが窺える。

一九九〇年一月号には、長野氏の投稿の他に「辻仁成ガンバレ！」「うれしさと感動と」「さすが仁成」の三件の辻仁成に対する投稿が掲載されている。「すばる文学賞」を同時受賞した、奈良裕明「チン・ドン・ジャン」に対する投稿は二件⁽⁵⁵⁾、佳作の浅賀美奈子「夢よりもっと現実的なお伽噺」に対する投稿は一件⁽⁵⁶⁾である。このように「読者のページ」に掲載された投稿数の違いからも、多くの「読者」が辻に関心を寄せ、辻を強く支持していたであろうことがわかる。加えて辻は、先に確認したように初めて編集部のコメントが付され、「読者のページ」において唯一「次号予告」と称して「クラウドイ」の広告が掲載された作家である。『すばる』における「読者のページ」以外の広告の扱いにおいても編集部の期待が垣間見える。奈良裕明「チン・ドン・ジャン」の広告と比較してみると大差のない巻号も見受けられるが、『すばる』一九九〇年三月号（三三七頁）の広告における枠の大きさとフォントサイズなどは辻の方が大きい。さらに辻の広告には作者紹介文・写真・イラストまでもが掲載された。これらの点からも、編集部も辻に対して並々ならぬ期待を寄せていたことが窺える。これらの要因は、ミュージシャンとしての注目度によるとも考えられるが、小説・作家としても期待させるだけのものを辻と彼の作品が秘めていたとも推測できる。

次は、「すばる文学賞」受賞後一作目の「クラウドイ」を賞賛し、辻に期待する「読者」の投稿を引用する。

「亡命とは何か」

辻仁成さんの「クラウドイ」さっそく読ませてもらい、亡命とは何か考えさせられました。何から亡命するのか。でもやっぱりできないという部分に、自分もそうではないかと思いました。とにかく辻さんの小説はストリートだけど、その中にリアルさがある所が気に入っています。そこが音楽との共通点かもしれない。これからの彼の活躍がたのしみです。

（清水理恵・埼玉県岩槻市・19歳⁽⁵⁷⁾）

辻の作品に対する投稿には、流行を追い求めているような「読者」による表層的なコメントも見られるが、小説の内容について言及・分析をして称賛するものが大半である。清水氏のように辻の音楽との比較を行い、感想を述べる投稿も見られる。次にも、ただ賞賛するだけではなく小説について考察し、作家へ積極的な期待を寄せる「読者」の投稿を引用する。

「『空白の世代』を越えて」

辻仁成の小説「クラウドイ」を読みたいがために「すばる」5月号を買った。独語、彼の作詞・作曲するエコーズの曲「ハミングバード⁽⁵⁸⁾」と、高村光太郎の詩「ぼろぼろな駝鳥」を頭の隅に想い浮かべたのは僕だけではないだろう。

もし彼の小説が「ブランク・ジェネレーション」という命題を背負わされているとしたら悲しすぎる。彼の作品の素晴らしさはその命題を超えた、更にその上にあって欲しいと思う。それ故、次回作が待ち遠しい。

(藤村隆久・三重県伊勢市・24⁽⁵⁹⁾歳)

辻の「クラウディ」を目当てに雑誌を買った点も注目に値するが、ECHOESの曲「ハミング・バード・ランド」に加えて、高村光太郎の詩「ぼろぼろな駝鳥」を想像した点が特徴的である。さらに辻も自認するように、辻の小説から「ブランクエネレーション」の要素を読み取り、さらにそれ以上の命題を求める積極的な「読者」と言えるであろう。このように文学に普段触れないわけではないが文芸誌は購読しない「読者」にも、『すばる』を購読してもらうきっかけに辻がなったことがわかる。

今回取り上げた「読者」たちは一六歳から三〇歳であり、辻は若い世代に多く支持されていた。ミュージシャンとして若者たちに人気があったことも理由として考えられるが、『すばる』の編集部が若い「読者」獲得を意図していた部分もあるであろう。この後は、辻の『すばる』における位置づけを考察するため、「読者のページ」掲載中に「すばる文学賞」を受賞した作家の「読者のページ」での扱いについて、辻を基準として前後に分けて確認する。

「読者のページ」掲載中、辻以前に「すばる文学賞」を受賞した作家は、第10回(一九八六年)本城美智子「一六歳のマリンプルー」、第11回(一九八七年)桑原一世「クロス・ロード」、松本侑子「巨食症の明けない夜明け」の三人である。⁽⁶¹⁾これらの受賞者の中で、特異な扱いを受けたのは松本侑子である。松本侑子と桑原一世の扱いの差について言及した投稿を引用して考察する。

「話題だけで売る雑誌でもないのに…?!」

どちらかというと「クロス・ロード」の方が好きな文章だった。最初から最後まで、作家としてのエネルギーを感じた。さわやかな、楽しい、好感の持てる作品だったと思う。次の作品もぜひ読みたいと思っている。作者に対しても、作品から良い印象を持った。

当選作は二篇だったのに、新聞広告は作者の話題性だけで一篇に偏って宣伝している。内容的にはどちらも良い作品だったと思えるし、話題だけで売る雑誌でもないと思うのだが…?!できれば二篇の当選作を力強くバックアップするという姿勢を持つてほしかった。作品以外のことで取り上げるのは、最近の軽薄なマスコミと同じレベルだと思うし、作家にも失礼ではないだろうか。

(清水恵・東京都立川市・26⁽⁶²⁾歳)

当選作は二作であったが、新聞広告などでは松本侑子の作品に偏って宣伝がなされていたようである。「作品以外のこと」とは、恐らく松本侑子という作者の経歴であろう。有名人が書いた小説として話題となり積極的に世間に受け入れられるよう、編集部も働きかけていたと考えられる。「読者」たちからの受賞直後の反応は八件と多かったものの、受賞後第一作目の発表時(一九八八年一〇月号)の「読者のページ」における投稿は二件であった。それらの他に、「読者のページ」において編集部のコメントが付されるなどの優遇は見られない。『すばる』編集部、ひいては集英社からの強力なバックア

ップを得ていた松本侑子であったが、「読者」の反応の大きさや「読者のページ」をはじめとした『すばる』誌面での扱いは辻の方が異質でより強力なものである。

以降は辻仁成以降の作家の扱いについて確認する。「第13回すばる文学賞」の後、「すばる文学賞」は現在（第44回募集中（二〇二〇年））に至るまで続いている。数多くいる受賞者たちの中でも「読者」からの扱いが特異な作家をあげて考察する。

一人目は「第14回すばる文学賞」（一九九〇年）を受賞した「大鶴義丹（受賞作「スプラッシュ」⁽⁶³⁾）」である。大鶴義丹は「俳優」を本業としており、二年連続で芸能界との兼業作家が受賞したことも話題となった。ただし受賞作「スプラッシュ」にのみ言及する投稿は、文学賞受賞発表後も「スプラッシュ」掲載後も見受けられない。一九九一年五月号において受賞後一作目の「湾岸馬賊」⁽⁶⁴⁾への投稿二件⁽⁶⁵⁾の冒頭に「スプラッシュ」の感想が述べられる程度である。

「第14回すばる文学賞」の際には『すばる文学賞』特集別冊（一九九〇年一二月）が出版されたものの、「読者」と編集部ともに辻への期待には勝らないと言えるであろう。

二人目は、「第20回すばる文学賞」（一九九六年）を受賞した「デビット・ゾペティ（受賞作「いちげんさん」⁽⁶⁶⁾）」である。「読者のページ」においては、一九九六年一二月号〜一九九七年三月号の四号に渡って「いちげんさん」に関する投稿が合計一〇件見られた。四号に渡って同じ作品への投稿が続くことは本例以外になく、「読者」と編集部ともにデビット・ゾペティに期待していたことがわかる。受賞作の「いちげんさん」は同年の芥川賞候補作になるなど、文壇

においては辻以上に注目されていたが、右記の例以外の「読者のページ」上などでの優遇はみられない。

三人目は、「第27回すばる文学賞」（二〇〇三年）を受賞した「金原ひとみ（受賞作「蛇にピアス」⁽⁶⁸⁾）」である。受賞作「蛇にピアス」は、翌年に「第130回芥川賞」を受賞した。「読者のページ」において、受賞直後の二〇〇三年一二月号では二件の反応が見られた。以降も誌面に登場するたび、必ずと言っていいほど金原ひとみについての「読者」の投稿が採用された。「すばる文学賞」に加えて「芥川賞」の受賞により、文壇にも認められたために「読者」と編集部からの期待が高かったようである。しかし前二人と同様に辻以上に「読者のページ」において編集部による明らかな優遇はみられない。ここまで、辻仁成以上に『すばる』編集部に期待された作家はみられないことを確認した。以降は、作家活動初期の辻が『すばる』において高評価を得た理由について、辻の特異性という点から考察する。

作家活動初期の辻の特性としては、第一に「ミュージシャン」との兼業作家であったことがあげられる。すでに確立していた知名度により、作家活動初期から名前が挙がるだけでも注目されるという「読んでもらう」ことにおける大きなアドバンテージを持っていた。しかし、この二足の草鞋を履いている作家には、世間的には良くないイメージが持たれた。そのことがわかる辻仁成と大鶴義丹の対談の一部を引用する。

「ぼくたちってやっぱりどこか似た者同士!!」

辻 それから、ぼくたちの共通項というと、ぼくはロック、大鶴さんは俳優という二足の草鞋を履いているということ。それについて何か言われましたか。

大鶴 ええ。この間、週刊誌のインタビューで、商業目的でそういう人たちに賞をとらせるのが多いけれど、大鶴君は違うよねって。ちよつとカチンとききましたね。

辻 あっ、それぼくも読んだ。そんなの、気にしなくていいんだよ。ぼくが去年受賞したときも、インタビューのほとんどがそれについてだった。ぼくらみたいな立場の作家をあまり快く思っていない人がいて、ときどきムカツと来るようなことを書かれるんですよ。

二足の草鞋をはいていることに關して、ちよつとした嫌味が書いてあるんだけど、〔……〕⁽⁶⁹⁾

この引用からもわかるように、マスコミ・出版界の性質にまつわる嫌味が二足の草鞋を履く作家には向けられていたようである。また、辻仁成は三作目執筆中に「音楽の世界の人から『おまえ、音楽をやめるんだろ⁽⁷⁰⁾う』」と伝えられるなど、音楽界と文学界の兼業は難しく、どちらかに絞るほかないものであるとも言いたげな偏見が存在した。芸能界における兼業作家への、世間からの風当たりの強さがわかるであろう。そのような逆境の中、辻自身も森瑤子との対談の中で、小説を書く上で必要なことについて次のように発言している。

「対談 森瑤子＋辻仁成 小説を書くエネルギー」

辻 〔……〕 大体二足のわらじの人って、何か賞をもらっても書かなくなる人が多いみたいですね。僕は小説がすごく好きだし、長編を書き続けたいと思っています。大切なことは持続力なんだと思うようにしています。⁽⁷¹⁾

対談の中で辻は、持続力を重んじて一〇時間は机に向かって小説を書くことにしていたことを明かす。小説だけだと煮詰まってしまうような生活も、むしろ二足の草鞋を履いているおかげで向き合えていると述べる。他の小説家には二足の草鞋を履いている現状を羨ましがられることも明かした。二足の草鞋を履いている現状をむしろ、辻仁成は持続力へ繋⁽⁷²⁾がけて小説を書き続ける力としたところに他の新人作家たちとの違いがみられる。「クラウドディ」の後には、一九九一年に『カイのおもちゃ箱』（集英社）、一九九二年に『ガラスの天井』『旅人の木』『フラジャイル』（集英社）、『そこに僕はいた』（角川書店）など小説やエッセイ集、戯曲も出版し続けていた。この持続力が、一九九七年『海峡の光』（新潮社）による「第116回芥川賞受賞」などの「読者」・文壇からの評価をもたらしたのであろう。

ここまで、『すばる』における辻仁成の作家としての立ち位置を『すばる』『読者のページ』を中心とした素材から考察してきた。しかし本章での分析は、「読者のページ」において特異な扱われ方をした「クラウドディ」のテキストそのものの分析を欠くものであり、完全な論とはなりえていない。本稿では前掲の小説分析の前提を整理し、稿を改めて論じる辻仁成「クラウドディ」論において本章の主張

を再検討することを課題としたい。

おわりに — 雑誌・「読者欄」研究の課題

本稿では、『すばる』「読者のページ」の基本情報を整理した後に編集部のアクションを分析した。さらに「読者のページ」から異質な作家「辻仁成」を取り上げて分析した。これから一九九〇年頃の『すばる』において「編集部のコメント」と「辻仁成」をめぐる大きな動きがあったことを見出した。特に後者に関しては、新規「読者」の獲得や熱心な「読者」を獲得する狙いがあることを読み取った。これらは『すばる』において編集部の雑誌や「読者」に対する方向づけとも言える、商業戦略の一つであろう。ここから、『すばる』という雑誌像や『すばる』が築き上げた「文学」の一端をも検討しようとする。しかし本稿の分析には、①『すばる』「読者のページ」の投稿というテキストの分析、②辻仁成「クラウドイ」を中心とした作品・雑誌分析の二つが欠けている。これらのために先行研究における「読者欄」の捉え方と『すばる』のそれとの差異や『すばる』自身の新規性・特異性を示しえておらず、論の具体性も獲得していない。①により「読者」という概念を整理して、先行研究における「読者欄」との性質の差異を提示できる可能性も少なくないであろう。②の作業をすることで内容としても「読者」・編集部に辻および彼の作品が受け入れられたことを実証する作業を要する。その考察対象の中心に位置する小説「クラウドイ」は、冷戦終結という社会情勢を反映させた、自己を取り戻す物語として大きな可能性を秘め

ている。これらを通して、「読者」・編集部・作家の関係性を分析すること、『すばる』という雑誌の編集部が想定していた「読者」像の分析、『すばる』が築き上げようとしてきた文学をより具体的に見出すことなどが可能であると考ええる。それだけではなく、①の分析によって「読者」や「読書」を考える新たな材料を見出すことや辻仁成「クラウドイ」のような他の題材を見出すことも可能であろう。これらの不足部分は今後の課題としたい。

本稿では『すばる』と「読者のページ」（「読者欄」）という枠組みをやや強引に設けたわけだが、商業的文芸誌が築き上げて来た「戦後文学史」を検討する上では、雑誌間での比較検討や前・同時代的な視点を取り入れる必要がある。殊に継続した「読者欄」が存在していた『群像』は、「読者欄」以外にも「読者」に言及する特集などが多くみられる。『群像』の考察を通して、時期・編集部の違いなどから「読者」と編集部の関係や戦後の日本文学史をより多角的に検討できる可能性がある。「読者欄」がないまたは少ないとは言え『新潮』、『文学界』、『文藝』の検討や、「読者欄」以外の素材の検討・分析も「戦後文学史」を考える上では欠かせない。このように課題は尽きないが、ここで一つの区切りを設け、今後も出版編集研究という観点から日本文学を見つめ直す試みを進めていく。

注

(1) 佐久間文子『「文藝」戦後文学史』河出書房新社、二〇一六年

(2) 「北大・藤女子大でいま……」は文芸誌らしからぬ企画で楽しめた。これからも既存誌とは異なったスタイルをめざしてほしい。(……)(佐々木

修・北海道札幌市・21歳)、『すばる』一九八六年二月号)(以降、『すばる』からの引用については、誌名を省略し発行年月のみを記す。加えて、引用本文中の「(……)」は稿者による省略を表す。)

具体例としては、少女マンガ特集(『すばる』一九八九年二月号)の掲載、江國香織『左岸』、辻仁成『右岸』の平行連載(『すばる』二〇〇二年二月号、二〇〇七年八月号)などがあげられる。

(3)『新潮』は戦後に「読者欄」そのものが存在しない。『文学界』(四号分)、『文藝』(二五号分)は「読者欄」の掲載はあったが短期間であった。

(4)雨田英一「近代日本の青年と「成功」・学歴——雑誌『成功』の「記者と読者」欄の世界」『研究年報 学習院大学文学部』一九八九年三月、学習院大学など

(5)田中卓也「近代少年雑誌における読者に関する一考察——明治期、昭和初期における『少年世界』読者の特徴を中心に——」『順正短期大学研究紀要』第三十八号、二〇〇九年、吉備国際大学短期大学部など

(6)嵯峨景子『『女学世界』にみる読者共同体の成立過程とその変容⑧——大正期における「ロマンティック」な共同体の生成と衰退を中心に』『マス・コミュニケーション研究』、七八巻、二〇一一年、日本マス・コミュニケーション学会、中川裕美『少女雑誌に見る「少女」像の変遷』出版メディアアパル、二〇一三年など

(7)岩橋郁郎『少年倶楽部』と読者たち』、刀水書房、一九八八年

(8)「読者欄」の投書から編集部意図などを分析できる可能性については先に触れたが、「読者」という点については注意を要する。「読者欄」に掲載された「読者」の声は、①その雑誌を購入する「読者」、②編集部が選出した「読者」、③編集部による投書の編集の可能性があり、など純粋な読者とし

て扱うことは難しい形になっている。そのため本稿では「読者欄」に登場する、限定的な読者について言及する際には、「読者」と表記し、その特異性を念頭に置いて議論を続ける。

(9)「読者欄」が編集部から読者へのアクションをも内包する点から、本稿における検討は近年重要性が見直されつつある「編集者」についても考察する可能性を秘めていると考える(高橋秀晴「編集者の功罪——滝田樗陰と谷崎潤一郎——」『上越教育大学国語研究』三一巻、上越教育大学国語教育学会、二〇一七年など)。編集者の重要性は、ジャーナリズム論においても編集者に関する論理的な研究が近年になって見直されていること(ムン・ヨンジュ『編集者の誕生と変遷——プロフェッションとしての編集者論』出版メディアアパル、二〇一六年)からも明らかであろう。

(10)水谷悟『雑誌『第三帝国』の思想運動 茅原華山と大正地方青年』ペリカン社、二〇一五年

(11)小平麻衣子編『文芸雑誌『若草』 私たちは文芸を愛好している』翰林書房、二〇一八年

(12)稿者の調査において『すばる』を除いた文芸雑誌における「読者欄」は、『海燕』(福武書店)の一九九三年三月号をもって存在しなくなった。『海燕』では「読者から」という名前の読者欄が掲載されていた。稿者の調べられた文芸雑誌に限定され絶対性に欠けるため、分析対象を限定する上での一つの観点とするものとして扱う。

(13)創刊当時、(一九七〇年)『すばる』は季刊誌であった。一九七六年九月号(第二五号)から隔月刊になり、一九七九年五月号から月刊誌になった。月刊誌になる以前にも「読者の頁」という名の「読者欄」は存在したが、本稿では月刊誌『すばる』の「読者のページ」についてのみ取り扱う。参考と

して、月刊誌『すばる』の発行部数を「表①『すばる』発行部数」として示す。

- (14) 一九八四年三月号
- (15) 表②「読者のページ」投稿数」を参照。
- (16) 一九八六年二月号
- (17) ゴシックでの強調
- (18) ゴシックでの強調解除
- (19) 横書きに変更
- (20) 二〇〇九年一月号
- (21) 「時代の要請するもの・文芸誌の使命」(一九八六年二月号)「中国武漢大学の19歳です!」(一九八六年九月号)、「四方田犬彦氏への反論」(一九九一年一月号) など
- (22) 一九九〇年五、六、七、九月号、一九九一年二、六、七、八、九月号
- (23) 一九九〇年三月号
- (24) 一九九四年二月号
- (25) 「まだまだ日本も捨てたもんじゃない」(一九八七年八月号)、「五千元よりすばらしいもの」(一九九〇年十一月号)、「中学生の感動」(一九九四年六月号)
- (26) 「ウメーの暮らしに満足」(一九九九年十二月号)
- (27) 各号における読者の年齢のまとめ及び分析は本稿では割愛し、稿を改めて論じる。
- (28) 一九九〇年五月号
- (29) 『新潮』一九九六年十二月号、新潮社
- (30) 一九八九年十二月号

(31) 一九九四年四月八日にCSB/SONY から発売された ECHOES の 7th アルバムのタイトル名である。(「Jinsei TSUJI Hironari OFFICIAL WEB SITE / Novelist / Japanese」 <http://www.j-tsuj-h.com/html/jinsei/1990-02.htm> 最終閲覧: 二〇一九年二月三〇日二二時五〇分)

(32) 一九八八年三月に、米国シービーエス・インクとの合併により設立された株式会社である。一九八八年一月に社名変更し、株式会社 ソニー・ミュージックエンタテインメントとなり現在に至る。(SONY 企業情報/会社沿革 <https://www.sony.co.jp/SonyInfo/CorporateInfo/History/history.html> 最終閲覧: 二〇一九年二月三〇日二二時五三分)

(33) 一九九〇年六月号

(34) 一九九〇年五月号

(35) 「原田宗典のファンより」(一九九〇年三月号)

(36) 一九九〇年七月号

(37) ここで触れている「初めての「読者」」については、別稿で考察、詳述する。

(38) 永山則夫元死刑囚の日本文芸家協会への入会問題に対して、抗議する形で協会を退会した、筒井康隆・柄谷行人・中上健次の三氏が寄稿した退会の弁である(「特別寄稿 日本文芸家協会退会の弁」(『すばる』一九九〇年七月号))。

(39) 一九九〇年九月号

(40) 第二二巻臨時増刊号(一九九〇年十二月)

(41) 一九九一年二月号

(42) 一九九〇年一月号、一九九一年一月号に連載されていた、曾野綾子の教育論のことである。

(43) 一九九一年六月号

(44) 「**日の丸**」に根本的議論を」(一九九〇年二月号)、「**曾野氏に反論**」

(一九九一年四月)、「**曾野綾子氏に異論**」(一九九一年五月)などの投稿がある。

(45) 一九九一年五号号において『すばる』に掲載された小説である。目次には、「大型新人一挙 600 枚」と説明が付されており、編集部からの期待が窺える。

(46) 一九九一年七月号

(47) 山本氏の投稿以前に、渡部直己の「文芸時評」に対する投稿は二件ある。その中の好意的な投稿の「**爽快な『文芸時評』**」(一九九一年四月号)が該当すると推測できる。

(48) 一九九一年六月号

(49) 一九九一年七月号

(50) 一九九二年三月号

(51) 一九九二年四月号

(52) 一九八九年十二月号

(53) 一九九〇年一月号

(54) 辻仁成『ピアノシモ』『クラウディ』そして小説家の至福と喜びとは辻仁成『青春と読書』一九九〇年八月号、五四頁下段二二―二五行目、集英社

(55) 「**奈良裕明が伝えたいこと**」「**言葉の多様さに感心**」(一九九〇年一月号)

(56) 「**人に読ませる術**」(一九九〇年一月号)

(57) 一九九〇年六月号

(58) 正式には「ハミング・バード・ランド」というタイトルで、ECHOES の 2th アルバム「HEART EDGE」(CBS/SONY、一九八六年六月一日発売)に収録された曲である。

(59) 一九九〇年六月号

(60) 80 年代、ブランクジェネレーションの作家として執筆活動本格化させる。([Insei TSUJI Hionari OFFICIAL WEB SITE / Novelist / Japanese] http://www.j-tsuji-h.com/Novelist/index_j.html 最終閲覧：二〇一九年二月三〇日二時四八分)

(61) 第一二回は受賞者なし。

(62) 一九八八年一月号

同号においてこの投稿の他に、松本侑子および「巨食症の明けない夜明け」について言及する投稿は七件見られた。([『クロス・ロード』の爽快な読後感』『巨食症』の最終部分、私の意見』『最後の一行が印象に残りました』『いまいち小説っばさに欠ける』『経験者として興味深かった』『めまいのしそうな文章に酔う』『感覚のすぐれた言葉が魅力』)

(63) 一九九〇年十二月号

(64) 一九九一年四月号

(65) 「**さすが受賞作家**」「**大鶴義丹氏に注目**」(一九九一年十二月号)

(66) 一九九六年十一月号

(67) 「**期待の新人、ゾペティ**」「**読後感さわやかな『いちげんさん』**」(一九九六年十二月号)、「**『いちげんさん』を読んで**」「**越境のチャレンジ**」「**言葉への反省**」「**京都、そして学生時代**」(一九九七年一月号)、「**『いちげんさん』への共感**」「**文学の国際化**」「**立派で整った文体**」(一九九七年二月号)、「**『いちげんさん』を教材に**」(一九九七年三月号)

(68) 二〇〇三年一月号

(69) 辻仁成、大鶴義丹「ぼくたちってやっぱりどこか似た者同士!!」『青春と読書』一九九一年一月号、二頁

(70) 日野啓三、辻仁成「対談 90年代、知の想像力をめぐって 日野啓三＋辻仁成」、一九九〇年八月号、一五一頁中段二四、二五行目

(71) 森瑤子、辻仁成「対談 森瑤子＋辻仁成 小説を書くエネルギー」一九九〇年一二月号、一六二頁中段四―六行目

(72) 「対談 90年代、知の想像力をめぐって 日野啓三＋辻仁成」において「新人文文学賞」受賞者も受賞作を越えて伸びていく人が極めて少なく、芥川賞をもらっても何も書かない人がいることを日野は嘆いている。

(73) この点に関しては、本稿の検討範囲が主に「読者のページ」と辻仁成「クラウドイ」に限定されてしまうことも大きな要因である。他の掲載作品・表紙などのデザイン・特集など多くの読み取るべきテキストが雑誌には内在されており、この雑誌における広がりも今後の大きな課題の一つである。

【表①】『すばる』発行部数

	出版部数(万部)		出版部数(万部)
2000	1	1979	-
2001	1	1980	5
2002	1	1981	5
2003	1	1982	3
2004	0.8	1983	3
2005	0.8	1984	3
2006	0.8	1985	3
2007	0.8	1986	3
2008	0.8	1987	3
2009	0.8	1988	3
2010	0.8	1989	1.5
2011	0.8	1990	1.5
2012	0.75	1991	1.5
2013	0.7	1992	1.5
2014	0.7	1993	1.5
2015	0.7	1994	1.5
2016	0.75	1995	1
2017	0.6667	1996	1
2018	0.5875	1997	1
		1998	1
		1999	1

※一九八〇～二〇〇五年：公称部数

※二〇〇六年～：JMPA（日本雑誌協会）調査による

※稿者の調査では年単位の概算的な数字しか入手できなかったが、「読者のページ」の有無にかかわらず、『すばる』の発行部数は年々減少していることがわかる。「読者のページ」には、少年雑誌などでの「読者欄」のように「読者」を増やすなどといった、華々しい力ほもちえなかったと言えるであろう。しかし苦境においても掲載が続けられた「読者のページ」には、編集部が強く込められていたと考えられる。

【表②】「読者のページ」投稿数
 投稿数の合計は、二〇四四件である。

巻\号	1号	2号	3号	4号	5号	6号	7号	8号	9号	10号	11号	12号	13号
第8巻		14	8	8	12	7	10	10	14	11	15	9	
第9巻	8	8	9	7	7	9	9	8	9		8	9	
第10巻	12	11	10	8		11	10	8	9	8	7	9	7
第11巻	9		10	8	7	7	7	7	7	6	7	8	
第12巻	11		14	9	10	10	8	7	9	8	9	11	
第13巻	4	8	10	11	9	7	8	6	8	8	8	10	
第14巻	5	5	9	9	8	7	6	10	8	10	10	7	
第15巻	9	6	9	8	10	9	10	8	5	8	9	9	
第16巻	4	8	11	7	8	9	8	9	6	8	9	8	
第17巻	8	8	7	8	8	8	8	9	7	7	7	9	
第18巻	8	7	8	6	6	7	7	6	7	9	6	6	
第19巻	6	7	6	8	7	6	7	7	7	7	6	6	
第20巻	6	6	6	7	7	6	6	6	6	8	7	7	
第21巻	7	6	6	8	6	7	7	6	6	6	6	6	
第22巻	6	6	6	8	8	6	6	6	6	6	7	6	
第23巻	7	7	6	7	6	6	6	6	7	6	6	6	
第24巻	6	6	5	6	6	7	6	7	7	7	7	6	
第25巻	7	7	7	6	6	6	7	7	7	7	7	8	
第26巻	7	7	6	6	6	6	7	6	7	6	7	6	
第27巻	7	7	6	6	5	5	5	5	5	5	5	5	
第28巻	5	5	5	5	6	5	6	5	5	5	5	5	
第29巻	6	6	4	5	5	6	6	5	5	6	6	5	
第30巻	5	5	5	5	4	5	5	5	5	5	6	5	
第31巻	4	4	4	4	4	3	4	4	4	4	4	4	
第32巻	4	3	4	4	4	4	4	3	4	4	3	4	
第33巻	5												

※ 斜線は「読者のページ」の掲載がない号
 ※ 空欄は未刊行の号